

蝶の博物詩

生態29

交尾2



スジグロカバマダラ (上♂, 下♀)
(2004年10月31日 竹富島)

photo by

Nishiyama



メスグロヒョウモン (左♂, 右♀)
(2001年8月15日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態29

交尾2

小学生のころ、“トンボ釣り”に夢中になった時期がある。普通、トンボをとるには補虫網かとりもちを使う。細い竿の先の部分を、粘着力の強い褐色の泥膏のようなものを巻きつけ、トンボや蟬をくっつけてとる。とりもちはモチノキの皮からつくるのだそうで、駄菓子屋で、メンコやベーゴマなどと一緒に売っていた。子どもの小遣いで買ったが、獲物を毀損するおそれがあり、何よりも着物を汚して母親に叱られるのがまずかった。これに対して“トンボ釣り”は雌のトンボを竿の先に糸で結んで飛ばし、そのおとりに寄ってくる雄を捕まえる方法で、大きいオニヤンマや美しいギンヤンマさえ手に入った。ギンヤンマの雄はギン、雌はチャンと呼ばれ、子どもの間で絶大な人気があった。

トンボは水面に尻尾の先を打ちつけるように産卵する。ギンヤンマはさすがに貫禄があり、雌雄が連結したまま、沼沢の水草に産卵していた。夕立が去って、舗装されていない道の水溜りに、アカトンボがときどき無分別に打水産卵していた。戦後に池、沼が埋め立てられ、小川が暗渠となった都会ではヤンマはほとんどいなくなった。わずかに残った公園の池にも鯉や金魚が住み、トンボの幼虫ヤゴの餌であるボウフラやアカムシを食べ、発育に4~5年かかるヤンマのヤゴの姿は消えた。

話を蝶に戻す。前述のごとく交尾に至る一連の配偶行動の主導権はヒトと同様に雄が握っている。同種の蝶では雄は雌より早く羽化し、雌の出現を待ち望む。ときには翅がまだ十分に伸びきらないのに交尾し、いささか可哀相な感じがする場合もある。また羽化直前の蛹に、数頭の雄が集まって、今か今かと待っている、さもしい状態もキチョウなどで観察されている。

今までに写した多数の交尾の写真を見直してみると、とくにアゲハチョウの仲間では、翅の破損した雌の写真がいくつかあった。また、なわばりをつくるいわゆる“待ち伏せ型”の蝶では羽化後数日たった雌のほうが交尾率が高いといわれる。

交尾の姿勢は雌雄が互いに反対方向を向くことが多い。前号のヒメシロチョウのように向き合って見つめ合うのはuniqueである。マダラチョウの仲間は、一方(主に雌)が翅を開いているところに他方(主に雄)が翅を立てて乗りかかり、また交尾の時間がたつと雌が肢を離して雄の体にとぶ(図)など、不思議な体位をとることも観察される。

交尾の間はおよそ1時間かたく結ばれている。オオムラサキなどは夜を徹し、翌日まで続くことがあるそうで、ヒトの及ぶところではない。夜に活動する蛾では蝶よりもいっそう長時間続くのはいうまでもない。

西山茂夫